
天空の城ニューカッスル

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空の城ニユーカーッスル

【Nコード】

N3446Z

【作者名】

義雄

【あらすじ】

言わずと知れたラピュタネタで一本。こまけえこたあいいんだよ！ という方向けです。当SSはArcadia様にも投稿しています。

才人が目を覚ますと、船員たちが慌ただしく動いていた。

ここは船の上、と言っても海上を進むものではなく、大空を往くハルケギニア特有の船だ。昨夜、ラ・ロシエールを発ってからかなり時間がたっているのか、すでに朝日が眩しい時間帯になっていた。舷側に座り込んだまま眠りに落ちていた才人だが、さほど体は冷えていなかった。温暖な時期というのもあるが、高速で移動しているわりに風を感じないので船に何か魔法がかかっているようでもあった。

ちらと下を覗き込んでみる。地上からはただ見上げるしかできない白いふわふわとした雲の上を船は滑るように進んでいる。飛び降りれば乗れるかもしれない、なんて子どもの空想じみたことを才人は思った。

「アルビオンが見えたぞ！」

メインマストの見張り台から船員が大声で叫んでいる。その声で隣に座っていたルイズも目を覚ました。

才人は立ち上がってぐつと一伸びして、もう一度眼下に広がる雲海を見下ろした。何も見えない。

「陸地なんてどこにあるんだよ」

そもそも港町に着こうというなら、雲ができるほど高いところを飛んでいるのもおかしい。

才人が首を傾げていると、はつきり覚醒したルイズがくいくいと才人の袖口をひっぱりながら船の前方を指さした。

つられて顔を向ければ、地球出身の彼にとって信じがたい光景が

広がっていた。

雲の合間に黒々とした大地が浮かんでいたのだ。それはとてつもなく巨大で、少なくとも彼が目にしたことのある地球上の光景にあてはまるものはない。凄まじい、大自然の神秘だとかそんなレベルではなかった。

ぼかんと口を開いている才人の目の前で徐々に空中大陸は全容をあらわし、峰に雪のかかった高い山脈や、空から流れ落ちる大河までを映し出していた。

「あ、あ、あ、あれ……」

「驚いた？」

あまりにもびっくりしている才人の隣で、ルイズは得意げに薄い胸をはった。

彼女の使い魔はぱくぱく口を開閉しながら震える指でアルビオンをさしている。いつもは生意気な平民が心底驚き、感動した様子に彼女はいたく満足した。

しかし、次に才人の口から飛び出た言葉は彼女が想像していたものとは全く違っていた。

「ラピユタは本当にあっただんだ……」

「へ？」

「父さんはうそつきじゃなかったんだ！」

ひゃっほーいと才人は甲板上をはしゃぎまわる。

ご主人様たる桃髪の少女は、そんな使い魔の狂態を、先ほどの彼と同じくぼかんと見守っていた。

言うまでもなく、才人の父親はラピユタの存在について言及していない。ただ彼がジブリファンなだけだ。

「右舷上方より、船が接近！ 所属は不明です！！」

「どうしたんだい、ゴリアテかい！」

「さ、サイト？」

見張り台の報告に才人のテンションはうなぎのぼりだ。

ルイズは使い魔の今までにないはしゃぎっぷりにますます混乱を深めていく。

「ご、ゴリアテってなによ？」

それを聴こうとしても、今の才人には話しかけづらかった。

なんというか、すごくハイになっている。聴けば教えてくれそうだとは、むしろ懇切丁寧に語ってくれそうではあったが、話がとんでもなく長くなりそうな気がする。

昨日までのしよぼくれた姿が想像できないくらい、今の平賀才人は絶好調だった。

二人を気にかけることなく船長が見張り台に指示を出している。結果は芳しくないようで顔色がみるみる悪くなっていく。

「空賊か……取り舵いっばい！」

「空賊？ 海賊だろ、てことはゴリアテじゃなくてタイガーモス号か。ドローラがいるに違いない！」

船員が必死の形相で帆を操っているというのに、才人は暢気にも右舷から乗り出して手を振っている。

全力で友好的な姿勢だ。まるで向こうの船員は旧知の仲だと言わんばかり。ルイズも呆気にとられて止めるどころではない。

数分後、結局裏帆を打って停船したこちら側に空賊の男たちが乗り込んでくる。才人は縛られながらも、きらきらした瞳で嬉しそうな顔をしていた。

それを見てルイズは「こいつ縛られて喜ぶの……？」と使い魔に強い不信感を覚えた。

道中、空賊たちの正体が王党派であると知れたり、乗っているのがドーラ一家でないと才人がしょぼくれたり、色々あったけれどもんやかんやで才人一行はアルビオンに、ニューカッスル城に着いた。雲の切れ目に遠く見えたロイヤル・ソヴリン号を見たときだけ「ゴリアテだ！」と叫んだ男がいたが、隣にいた主人がひじ打ちをかまして黙らせた。

そして滅びを迎える国、アルビオン最後の晩餐会の終わり。才人はワルドに肩を叩かれた。

「使い魔くん、きみに言っておかねばならぬことがある」

口元にはうつすらと笑みが浮かんでいる。しかしその瞳は冷たい光をたたえていた。声もルイズと話しているときとは雲泥の差で、素っ気なく、貴族が平民に接するそれであった。

カチンときたが、ここで問題を起こすのは勇敢な皇太子に申し訳ない、と才人は珍しく自制心を働かせた。先を促すと、ワルドは驚嘆すべきことを言っただけだ。

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

こいつ、なに言っただけ？

正気じゃない。それが正直な感想だった。

いつ敵が攻めてくるかもわからない戦地で結婚式を挙げるだなんて。出来の悪い映画でだってしないだろう。

だが、ここは出来の悪い映画よりも安っぽい言葉が行き交う貴族様が暮らす世界で、なおかつ目の前のキザな男はその一員だった。胸の奥からむかつきがこみ上げてくる。ワルドという男から漂う違和感、おかしさが心の奥底で結実していくのがわかる。

婚姻の媒酌を頼むだとか、そういうんじゃないだろ。

「きみも出席するかね？」

「違う」

才人はかぶりを振って言う。

「あんたが今言うべきことは、そうじゃない」

鋭い眼光がワルドを射抜いた。平民の、それも少年らしからぬ強い眼だった。魔法衛士隊の一つ、グリフォン隊隊長を務めるワルドですら思わず息をのんでしまう。

「『君も男なら聞き分けたまえ』これが今のあんたに相應しい言葉だろ」

ずいと才人が一步踏み出す。

「そうだ、似てるんだ」

背負ったデルフリンガーを抜き払う。才人がついさっきまで寝室

を訪ねていた給仕が数歩後ずさった。

彼女の姿も才人の目に入らない。ただ目の前の男を睨みつけている。左手のルーンがいつもより強く光っていた。

「あんだ、悪者だろ。冷静に考えたらラ・ロシエールで襲ってきたヤツと背格好も、靴も、杖も一緒だ」

夜間の戦闘ではあったものの、ハルケギニアの夜は地球の闇よりよっぽど明るい。一拳一足に注視した戦いの記憶を引っ張り出してみれば、これほど単純なことはなかった。

それに、と才人は言う。

「雰囲気かムスカそっくりだ」

ムスカ？とワルドが口にしようとした瞬間、才人が殺到した。

まさかこんな人目があるところで襲い掛かってくるとは、予想もしていなかった彼はあっさりしばかれお縄を頂戴した。

平民が貴族に手向かったと一時城内は騒然としたが、不意打ちとはいえ魔法衛士隊長が平民に打ちのめされてどうすると批判的な声も上がった。

なお、ワルドの懐から白仮面とレコン・キスタの指令書が出てきて容疑は確定となり、結婚式はお流れとなる。

うむむ、と才人は腕組みして考え込んでいた。

ニューカッスル城の一室、才人に与えられた部屋は下位貴族が使うもので、個室だった。ベッドの寝心地は普段の二ワトリの巢なんかよりよっぽど良くて、彼の本音としては今すぐ眠ってしまいたい。それでも才人はあまり良くない頭を働かせてうんうん唸っている。本来、平賀才人は戦争なんぞと係わりあいになることなんて、まっぴらごめんである。しかし、最後の晩餐で幾人かの青年と知り合った。一度でも話した相手が死ぬのをそのままにしておくなんて、それはイヤだった。

さらに言えば、ちよつとだけ考えがあった。

「やっば……呪文だよなあ」

空飛ぶ海賊がいて、空中大陸があつて、ムスカっぽい悪役がいた。もう彼はこの世界がラピユタのシナリオをなぞっているようにしか思えなかった。

となると、この王党派というヤツはドーラ一家だ。ドーラみたいな人はいかなかったのが残念なところ。ついでに言えばウェールズや家臣団もカツコよすぎてそれっぽくない。ウェールズのような爽やかイケメンが「ママ！」なんて野太い声で言う姿なんて想像もつかない。

相手になっているレコン・キスタという反乱軍は將軍率いる軍隊だろう。ムスカポジションのワルドが「人がごみのようだ！」と一掃してくれなかったことが悔やまれる。

そして、才人はパズーでルイズはシータ、そういう役どころになるはずだ。

だがしかし、足りないものがある。

「飛行石もなんもねえぞ……」

呪文一発で消し飛ばような、大逆転できる手段が才人には思いつ

かない。

ひたすらにバルスバルスバルスと呟きながら悩む。なんにも思い浮かばず、ぼてんとベッドの上に寝っころがった。

たかが一高校生が戦争終わらせるとか、無理かなあ。

石造りの天井が今にも降ってきそうな幻覚。大きく息を吸って、また吐いた。

しばらくして、弱々しいノック音が一人の空間に染みわたる。どろろと声をかけ、入ってきたのはルイズだった。

「サイト……」

ノック音同様、彼女も弱り切っているようだった。その姿はいつになく覇気がない。ちくりと胸が痛む。

才人は起き上がってベッドの端に腰掛けた。一人分の空白を開け、ルイズもそれにならう。

何かを話すことなく時間だけがただ過ぎていく。

お互い、言いたいことは漠然と心で渦巻いているが、それをうまく表現できないようだった。

「その、子爵さんは残念だったな」

才人が切り出した。ついさっきの出来事を蒸し返すのも良くない気がしたけれど、これ以上は沈黙に耐え切れず、また他の話題も思いつかなかった。

ルイズは答えない。彼女としても突然のことでもまだ整理がついていない。再び無言の幕が二人の間に降りた。

それを引き裂いたのは、また才人だった。

「俺さ、好きな映画、つってもわかんないよな。えつと、演劇、その演劇があるんだ。『天空の城ラピュタ』って言うんだけど。この大陸なんかよりすぐくちっちゃな浮いてる島と、それをめぐる人たちの話」

「……あんだ、アルビオン見たとき死ぬほど驚いてたじゃない。大陸が浮いてるなんてって」

「お話だからいいんだよ。少なくとも俺の世界じゃ島は飛ばないの、ふっーは」

いつもどおりの元気な声とはいかず、少し重苦しい。それでもルイズの反応が嬉しくなって、才人はつつかえつつかえ自分のことをラピュタのことを話しかける。

彼女は才人の話にいちいちうなずいて、それがまた普段と違って幼い仕草だったのが印象に残った。

「でも現実には物語と違うもんな。『バルス』なんて言ってもこのお城が沈むわけないし。いつそみんな戦争のことなんざ忘れちまえばいいのに」

そう言っつて、才人はベッドに倒れ込んだ。窓から差し込む月明かりがやけに眩しく感じる。

ルイズはじつと黙り込んだまま、組んだ両手に目を落としている。双月は彼女が来てから少しだけ傾いていた。

再び狭い部屋をノック音が震わせる。今度は弱々しくなく、どこか硬質な感じがした。才人はぼんやり、どうぞと言葉をかける。

「失礼するよ」

予想だにしない人物が入室してきた。

「で、殿下」
「やはりここだったか」

ルイズは跳ね上がるように立ち、皇太子を部屋に迎えた。才人はゆっくりと起き上がり、一応ルイズと同じく立ち上がる。

平時なら不敬にも程があると鞭が飛んできたに違いない。しかし、ルイズは緊張して才人の動きに気づかなかったし、ウェールズも気にしなかった。

さらさらと音をたてそうな金髪を揺らすウェールズは、その手に古びた小箱を携えていた。

「ラ・ヴァリエール嬢、きみに頼みがある」
「承りますわ。殿下」

「アルビオン王家に伝わる秘宝を、始祖のオルゴールを預かってほしい。盗賊どもに奪われるくらいなら、トリステイン王国が引き取ったほうがずっといい。元は叔父が保管していたものだけだね」

「……確かに、預かりましたわ」
「では、よい夜を」

それだけ言ってウェールズは去っていった。
後に残されたのは、立ち尽くすルイズと何ともいえない空気だけ。
それが才人には耐えきれなかった。

「そ、それオルゴールなんだってな。聞いてみようぜ！」

とにかくこの重苦しい雰囲気吹き飛ばしたかった。

返事もせずにルイズはきりきりとオルゴールのぜんまいを巻く。

「……なんにも聴こえないな」

きりきりとぜんまいだけが動いているのに、才人の耳には何も届かなかった。

しかし、ルイズは違った。

「え……ウソ………」

歌が聴こえる。それに続くのは古代ルーンの詠唱。ルイズはつられて口にする。

「リテ……ラトバリタ・ウルス……アリアロス・バル・ネトリール」
「ルイズ？」

すると、不思議なことに水のルビーが仄かに輝きだした。

その光はどんどん強く、やがて一条の光となる。才人の服を伝つてのぼり、額を指した。彼がそこからどいてみると、光はニューカツスルの東方、雲の海へと延びている。

「これ………」

「ひよっとして、ひよっとするのかコレ!？」

一人とんでもないテンションになっている才人を置き去りに、ルイズは皇太子へ知らせにいった。

そこから先、語ることはさして多くない。

水のルビーの導きに従えば、天空の城があった。そして才人の知識を生かしてゴーレムのようなガーゴイルのようなもの（才人が言うにはロボット兵）を動かし、レコン・キスタは滅びた。そしてルイズは独立国家ラピユタの女王に即位した。反対の声は、あまりに圧倒的な戦力の前に拳がらなかった。

「……なんか違う気がする」

根っこがうにようによ生えている玉座の間でルイズはため息をついた。

「いいじゃねーか。戦争も無事終わったし、ルイズは魔法が使えるようになった」

どこまでも気楽な使い魔だ、と軽く睨みつけてやる。でも才人が言うことも正しかった。

戦争は大きな被害もなく終わった。あのあともう一度オルゴールを聴けば自分が虚無の担い手であることもわかった。

どうしてもわからないのは、何故自分がこのよくわからないお城を動かせるか。

「細かいことに気にすんなよ」

「そうね……」

釈然としない気持ちを抱えたままルイズは頬杖をついた。はたと、思い出したことがあった。

「そういえばあんたさ」

「ん？」

「なんか言ってたわよね」

「なんかってなんだよ？」
「えっと……」

ふっと脳裏にその言葉がよぎる。

「そう、そうよ」

「思い出した？」

「うん」

「じゃあ言ってみ」

ルイズは珍しく、にっこり笑ってたずねた。

「『バルス』ってなに」

「あ」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3446z/>

天空の城ニューカッスル

2011年12月11日21時54分発行